

Title	フランス革命二百年記念に発行された内外の諸著書について : 史学第五九巻一号の誤植訂正と補遺
Sub Title	
Author	平山, 栄一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.1 (1991. 4) ,p.167- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910400-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『フランス革命二百年記念に発行された 内外の諸著書について』

——史学第五九卷一号の誤植訂正と補遺——

平 山 栄 一

誤植訂正

誤 正

ページ (136)
上欄 5行
Fiero → Fierro

〃 10行
Chronioque → Chronique

ページ (137)
下欄 6行
powvoir → pouvoir

ページ (142)
上欄 14行
山崎耕一訳の下に → 法大出版局 (1982年) を記入

ページ (144)
下欄 7行
critioue → critique

〃 8行
Fammarion → Flammarion

〃 10行
rolufion → volution

以 上

「史学」第五九卷第一号に掲載させていただいた拙稿につき、追加の必要が生じたので、以下簡単に述べる。

一、邦文書

- (1) 河野健二編「資料フランス革命」、革命期の重要な法令、宣言その他の史料を邦訳したもので、わが国では始めてのものである。(岩波書店、一九八九年)
- (2) 多木浩二著「絵で見るフランス革命——イメージの政治学(岩波新書、一九八九年)」。フランス革命に賛否両面からの絵画、カリカチュアを諸書から集めたもので、適切な説明を加え興味深く革命が理解されるようにまとめられている。
- (3) 田村三郎著「フランス革命と数学者たち」(講談社ブルーバックス一九八九年)。フランス革命前後にわ

批評と紹介

たり、数学者や科学者たちの革命とのかかわり、その他について平易に興味深い説明がなされ、肖像画、地図など多くとりいれてあり、有益な解説書として利用されよう。

- (4) 小林良彰著「高校世界史におけるフランス革命論批判」(三一書房一九八九年)。さきに「フランス革命史入門」その他の諸書で革命史批判の諸見解を述べられてきた著者が、このたびは大学入試問題に頻度たかく出される革命史の部分が、出題者の検討不足や、誤った見方から、解答者を困惑させる場合が多いことを、具体例をあげて鋭く批判している(三一書房、一九八九年)。

二、外国書

- (1) Madame de Staël ((*Considération sur la Révolution française, présenté et annoté par Jacques Godechot*)), Paris Tallandier, 1983.
- (2) André Chénier ((*De L'Utopie à la Terreur, 1789-1793*)), Éditions du Trident, Paris, 1989.
- (3) Babeuf ((*ÉCRITS introduction par Claude Mauriac*)), Paris, Messidor/Éditions sociales, 1988.
- (4) Elisabeth & Robert Badinter ((*Condorcet, Un in-*

tellectuel politique)), Paris, Librairie Arthème Fayard, 1988.

- (5) Jean-Paul Bertaud ((*La vie quotidienne en France du temps de la Révolution, 1789-1795*)), Paris, Hachette, 1989.

(6) Dominique Godineau ((*Citoyennes tricoteuses*)), Édition ALINEA, Aix-en-Provence, 1988.

(7) Christian-Bernard Hirts ((*Atlas Historia de la Révolution, préface de Jacques Godechot*)), Paris, Tallandier, 1989.

(8) Richard Cobb & Colin Jones ((*The French Revolution, Voices from a momentous epoch, 1789-1795*)), London, Simon & Schuster, 1988.

(9) ((*Le Calendrier républicain, Service des Calculs et de Mécanique Céleste du Bureau des Longitudes, Unité Associée du CNRS*)), Éditions de l'Observatoire de Paris, 1989.

(10) Bronislaw Baczko ((*Comment sortir de la Terreur, Thermidor & la Révolution*)), Paris, Gallimard, nrf essais, 1989.

(11) Bernard Lerat ((*La terroisme révolutionnaire,*

1789-1799)), Paris, Éditions France-Empire, 1989.

(1) はフランスの文学史上に十九世紀のロマン派の代表者として名高いスタール夫人の作として一八一八年に出されたが、ゴデシヨ氏が、四六頁にわたる序文と詳密なノートを付けて再刊されたものである。ネケルの娘であり、同時代の人として革命を批判し、独自の意見を述べ、ひじょうに興味ある書である。

(2) ロベスピエールに反対したため投獄され、テルミドール政変の二日前に刑死した詩人で、イタリアオペラの主人公ともなったアンドレ・シェニエの詩作以外の政治論を集成したもので、おそらくはじめてまとめられたものと思われ、ベック・ド・フキエール氏により、彼の生涯と政治論についての詳細な解説をともなっていて読むのが楽しみともいえる書である。

(3) バブーフの解説や著作の抜萃も、これまで種々出されているが、マゾリック氏の編集による本書は、故アルベール・ソブール教授の求めにより編集され、最近までに発見された諸論稿をも含み、バブーフ研究にとって重要な書となっている。

(4) バダンテル夫妻(?)のコンドルセは力作である。フィロゾフから革命家となったこの人についていまま

種々の著作があるが、本書は政治思想の展開を中心として、おわりの悲劇まで詳細に書かれている。なおバダンテル女史の編集による ((Correspondance inédite de Condorcet & Madame Suard, 1771-1791, Paris, Fayard, 1988)) も同時に出され、革命前からはじまり、革命初期までのコンドルセとシュアール夫人との往復書簡が、この革命期の学者の思想の内面と、いかにして革命に関係するようになったかを知る手がかりを明かにする意味で興味ある文書となっている。

(5) 著者 J・P・ベルトールはソルボンヌ教授で、革命にかんする多くの著書があるが、革命期の人々の社会生活を述べた本書は有益である。

(6) トリコトゥーズとは、政治に関心をもち、編みものをしながら議会で傍聴する女性たちを意味するというが、この人たちについて、M・ヴォヴェル教授と本著者の監修する「女性と革命」双書的一篇として出され、革命期の女性たちの考え方、行動を詳説した。

(7) 革命期の地図もいろいろ出されているが、ゴデシヨ氏の序文をもつ本書は、フランス全土のなかでとくに革命に関係ある部分をとりあげて、詳細に示しており、地図としてわかりやすく作製されている。

⑧ イギリスのフランス革命史専門家として知られているリチャード・コップ氏が中心となって、フランス革命を当時の目撃者の証言、書簡、日記、新聞記事、その他を十分に利用して、真実を究明しようと試みた。大版の二五〇頁ばかりで大冊ではないが、色彩を含む豊富な図版をとりいれて興味深く読ませる一書。

(9) フランスの緯度観測所の専門家が編集した共和暦の創設から廃止までを、グレゴリウス暦と対比して詳細に説明したもの。

(10) 著者はジュネーヴ大学の歴史教授であり、一七九四年七月、ロベスピエールの突然の失脚と処刑により、テールが停止となったが、国民のあいだに急に自由の到来と新時代が始まったことが、信じられないで、どのような困惑あるいは動揺が生じたか——それは現在ヨーロッパでも、東欧におこっていることであるが——その問題に焦点をあてた革命史の考察となっている。

(11) ナントのリセの歴史教授である著者が、テロリズムの本質を究明しようと試みた一書であり、レーニンが十月革命直後に「テロリズムを禁止する必要はない、なさねばならないことは、それを合法化することである」といった言葉を引用しながら、革命のテロリズムが現代

史にどのような関係をもったか、その他のことを考察している。

本紹介のような仕事は、革命史全体に精通した大家のなすべきことであり、正直に言って筆者としては手にあまることであつたと感じた。なお革命についての著書の刊行は、今後もつづくことであろう。

(12) Alfred Fierro (*Bibliographie de la Révolution française, 1940-1988*), 2 vol. *Références cf. PARIS, 1990.*

これは最近約五十年間に出されたフランス革命史の書籍解題として、もっとも詳しく、著者名索引のほか、各主題別に著書をあげており、信頼できる、革命史研究者にとって必備の書である。